

# クララ

林芙美子

青空文庫



むつは、何か村中が湧きかえるような事件を起してやりたくて寝ても覺めても色々なことを考えていました。窓に頬杖をついて山吹のしだれた枝を見ていると、山吹の長い枝がふわふわ風にゆれています。じつと見ているとだんだん面白くなって來ました。風は神様に違いないと思ひ始めました。にんじゆつをつかつて姿を見せないで、山吹の葉の下で鼠のようにチロチロ遊んでいるのだらうと思ひました。むつは前よりも、もつと熱心に視つめました。羽根の生えた蟻のような蟲がぶうんと山吹の枝へ飛んで來て兩手でお祈りをしています。風の神様はエス様だらうと思ひました。教會の牧師さんの家の下には、たくさんかめがいけてあつて、

そのかめの中へ油がたくさん貯えてあるそうだけれども、あの油が風の神様ではないのだろうかと、むつはぼんやり羽蟲のお祈りを見ていました。しばらくすると羽蟲はまたどつかへぶうんと飛び去って行きましたが、山吹の長い枝の一つ一つに陽が強くなつて来て、草色の柔い葉っぱがひらひら雨に當り始めました。葉っぱはあの羽蟲に何か注射をされて、あんなに生きがえつたのだろうかと、むつは土間から庭へ降りて行って、よく陽のあたる山吹の枝を一つ一つ強くひっぱってみました。どんなにひっぱってもひらひら葉っぱが動いているし、むつの赤茶けた髪の毛まで右の頬へ風で吹きたおされて來ます。むつは風の子を両手でびしゃびしゃ叩いてやりました。だが、風は眼には見えないので、すぐひ

ばの垣根の上の方へ音をたてて逃げてゆきます。むつは空の上へ逃げて行った風を見ました。雲がたくさん飛んでいます。風の乗物は雲なのかも知れないと思いました。キツプを大人のように買うのだろうかと思いました。むつは、身軽るな風のように飛びあがって雲へ乗りたくて仕方ありませんでした。雲へ乗って村のひとつたちを驚かせてやりたくて仕方ありませんでした。首が痛くなるほどおおむいていると、ぐらぐらと後へたおれそうになります。何か世の中で一番おいしいものを食べたいものだと思います。学校の先生の所にある栗まんじゅう飛んで来いと、むつは心で云いました。ふわふわ空を飛んで来るようです。むつはそれを両手ですくって口の中へ押しこんでうまいうまいと云いました

が、生唾が出るばかりで、栗まんじゅうの姿が口のそばで消えてしまうのです。ああ、うちの母さんはなぜお金もうけが下手なのだろうと、むつは自分の母親はきつとエス様に憎まれているのに違いないと思いました。朝早くから、むつの母親は方々の百姓仕事の手傳いに行きました。弟の太郎は臭い鼻汁ばかり出しているし、むつは、大人の口まねで「ええくそいまいましい。」と舌打ちするのでした。學校へは一里もあるので、むつはなんとかか云っては休んでばかりいました。むつは三年生です。先生は木内たねと云って、十八ばかりの若い先生でした。紫色のメリンスの袴をしていて袴が長いので、むつは先生の袴の裾をはぐって見て、木内先生から叱られたことがありました。むつは先生の袴の

中が不思議で仕方がなかったのです。先生は短い着物だから袴をはくのではないかと思いました。運動場にいる先生の袴は、今のように圓く風でふくらんで、そのむらさきの袴の中から、いっぱい蝶々が出て来るような氣がしてなりませんでした。むつは、雲を見ていると、風は木内先生の袴の中にも住んでいるのかと考えたりしました。木内先生は神様に違いないはずなのに、木内先生はむつ達がドタンバタンと開けひろげて入る臭い便所にも入って行きました。あんなにきれいな先生が、どうしてむつ達の入る便所へ入るのか判りませんでした。また、木内先生は、むつ達と一緒に晝御飯を食べるのでしたけれども、むつ達と同じように梅干がたびたびついているのです。むつは顔をあげて、木内先生の口

もとをしつと視ているのです。あの梅干は金の梅干かも知れない  
と思いました。

木内先生はオルガンを弾く事が上手であつたし、男の先生たち  
から大變好かれていて、男の先生達は掃除の日、むつ達の掃  
除をしている運動場でこんなことを云っていました。

「ヴィナスだね。」

「ヴィナスとは何だね。」

「愛の神様だよ。」

「處女なのか？」

「それは愛の神様だもの判らないよ、處女じゃないかも知れない  
よ。」

「木内先生は處女だよ。」

「それはそうだろうね……。」

むつは、木内先生を神様だとききましたのでびっくりしました。組の子供たちに、木内先生は神様だよと教えてやりました。子供達は、

「神様と云うと八幡様だね。」

「いゝや、いなりさんだよ。」

「木内先生は女の神様だぞ。」

「そんなら、頭の後から御光が射すんだよ。」

木内先生が通ると、みんな先生の後へ走って行きましたが、セルロイドのSピンに陽があたっているきりでした。——むつは、

學校へ行つても太郎を連れてゆかなければならないので、それがいやでいやでなりませんでした。太郎は皆が臭い子供だと云います。本當に小便臭いので暑くなつて來るとおぶうのがいやでいやで仕方ありませんでした。

むつは、雲について歩きました。今日は學校を休んでしまったので、畑徑を歩いていても、村中に子供がいないのでせいせいした氣持ちでした。むつは取りのこされたように淋しかったのですけれど、學校へ行くのは嫌いでした。むつは字を讀むことがむずかしかつたし、何度教わつても、別のことばかり考えているので、すぐ忘れてしまいました。

むつは、學校を休んで家にいる事も好きませんでした。家の中はごみつぽくって、何年も天井をはらわないので、くもの巣に煤がたまつて、魔物の家にいるようなのです。今日も太郎を寢かしつけると、むつは雲を追つて、馬鈴薯畑の方へ出ました。森も畑も海のように青くて、それたちを見ていると、馬の背中のようにもくもく動いて見えるのです。もぐらの大合戦だぞと、むつは、風に動く畑や森を見てそんなことを考えました。今夜は蕎麥の粉を貰つて來てやると、母さんが云つたけれど、蕎麥の粉をかいて黒砂糖をまぶして食べたらうまいなど、むつは徑の上うつる自分の白い大入道と一緒に、土ぼこりをけたてて歸つて來ました。

太郎はまだ眠っていました。鼻汁が固くなつて、鼻の穴で青い

泡を吹いています。むつは太郎へ煮え湯をかけて殺してしまおうかと思いました。遠い昔、母親がかにを買って来て煮え湯へほうりこんだのだが、すぐ水色の蟹がいんにくのように朱くなつてしまいました。太郎も煮え湯へほうりこんだら、かにのように美しい子になるだろう。そうして、臭くて青い色をした鼻汁なんか、とけてなくなつてしまふだろう。むつは土間から乾いた桑の根っこをかかえて來ました。桑の根っこをいろいろにくべて、マツチをすつて投げ込むと、桑の根はからからに乾いているのですぐ強い炎をあげはじめました。横の川へ行つて、鐵鍋にいったい水を汲んで自在鍵にそれを吊しました。湯が沸く間に、むつは部屋の隅にある古ぼけた箆笥をがたぴし開けてみました。母親の大事なも

のは何でもこの中へ入っているのをむつは知っていました。筆筒には長持ちのような引出しが三ツついていました。一番上の引出しには、亡くなった父親の寫眞だの、父親が一二度しかはかなかつた男下駄が新聞に包んで入っていました。むつの下駄も入っていました。

二番目の引出しには、太郎のゆかたやぼろ切れが入っていました。三番目の引出しには、空いた菓子箱や、こうもり傘などが入れてありました。むつは腹がへっていたので、筆筒の中へ何も食いものがないとがっかりしてしまいました。「ええいまいましい！」

むつは、大人たちのまねをしました。いろりの火は燃えるだけ

燃えると、もう白い灰になってしまつて森閑としていません。むつは鍋へ手をさしこんでみました。湯は風呂みたいな熱さでした。むつは腹がたつてしまつて、また土間へ降りて行き、こんどは桑の根つこの大きい奴を熊の首のようだぞとひとりごとを言いながら引きずつて來ていろいろの中へいれました。白い灰が飛び立ちました。まだ火がのこつていたのか、新らしくほうり入れた乾いた桑の根はすぐくすぶり始めました。むつは腹這いになって、ふうつと火を吹きましたが、咽喉のいがらっぽい白い煙がむつの吹く息で向うへ押されてゆきます。風の神様が、ここにもいるのだからかと、むつは唇の處へ手をやり風の神様をつかまえようとしますと、むつの吐く風は涼しい氣配をたてて五本の指の間からそつ

と逃げてゆきます。火がやつと、桑の根っこに燃えつきました。太郎を起さないようにして早く殺してしまおう……：：：學校へ行くときにも身軽るになるし、第一、むつの弟は臭いぞと云われないで済むと思いました。湯がぶつぶつ泡を浮べて白い灰がいっぱい湯の上に流れています。

むつは腹がへつて來てがまんが出来なくなりました。土釜のふたを取つてみたけれども、水を入れてあるきりで、杓子に米粒一つついてはいないのです。むつは土間へ降りて、鶏小舎をのぞきました。三羽の鶏は、むつが網の中へ入つて來たので、急に身づくろいをして、肩をそびやかせて怒るのでした。寝わらの底を探つてみると、ぬくい奴がむつの手に二つさわりました。むつはそ

れをそつと抱いて網の外に出ると、いろりの處へ居坐り寄るようにして、煮えたつ鍋の中へぬくい卵を二ついれました。これが知れたらえらく叱られるとは思いましたが、黙つていれば判るものかと、むつは鍋の上へ顔を寄せ、はよ煮えはよ煮えと言いました。「はよ煮え、はよ煮え、大きな眼玉、眼玉が二つ、はよ煮えはよ煮え。」

すると、二つの卵が、本當に閻魔様の白眼のように見え始めて來るのです。湯がぼこんぼこんと煮えて來ると、卵もぼこんぼこんと鍋の底で運動を始めました。眞黒い鍋なので、運動ぶりがよく見えます。

「こわいぞ、こわいぞ……。」

本當にむつには怖くなって來ました。むつは着物の袖で鍋のつるをつかんで、土間へ降りましたが、手元が熱くなったので鍋のつるを遠くへほうり投げました。煮えたつた湯は四圍へ散つて、鶏の背にも湯がこぼれたのか、おそろしい騒ぎかたで、ククククククと鳴きたてて羽根で風を入れています。卵は土間に墜ちてうんこのような黄味を飛ばしました。むつは「熱い！」と云つて、自分の裾をおさえましたが、右のふくらつぱぎに、みみずのような紅い筋が出來ました。やけどをしてしまったと思ひました。横の川へ行つて、水へ脚をつけましたがひりひりして痛くて仕方がないので、卵をあのままにしておく、叱られると、むつは、裾で脚を拭いて、土間へ入り、立つたまま卵の白味を指ですくつ

ては食べました。卵と云うものはどうしてこんなにおいしいのだろうと、むつはつぶけた黄味を掌にどろりとしたたらせて、猫のようにそれをなめるのでした。口の中で四方八方から唾が舌の上へ寄ってくるようにうまいのです。

太郎はまだ寝ています。土間にこぼれた湯はすっかり土の肌に浸みてしまつてもとの通りになりましたが、鍋はむつに投げられたのでつるがひどくゆがんでしまいました。むつは鍋をさげて横の川へ行き、石塊をひろつてつるをカンカン叩きましたが、つるのゆがみかたはだんだんひどくなるばかりです。むつは脚が痛くて仕方ありませんでした。鍋をへつついの上へもどしておく、遠くへ遊びに行つて來ようと、學校とは反對の日曜學校の庭の方

へ行ってみました。むつの家から半道はありましたが、むつは少しも疲れませんでした。日曜學校には櫻の木が三本しかありませんでした。その櫻の木はきたなく繁っていて、毛蟲がいっぱい卵からかえっていました。むつは毛蟲がきらいでしたので、櫻の木の下を一息で走り抜けると、ぞくぞくと身ぶるいしました。身ぶるいするのは、櫻の木の下を通る時だけ、毛蟲の魔物が、とりつくのだからだろうとむつは思いました。

日曜學校は十疊位の廣さしかない百姓家で、牧師さんは眉毛の長いお爺さんでした。いつも荒地に草花を造っていました。夾竹桃の小さい木も植わっていました。ダリアだの虞美人草だのジギタリスだの植わっていました。土地がやせているので花がみんな

小さいのです。教會の先生は町へ行つたのかいませんでした。教會の裏は竹やぶになっていて、鶏小舎のこわれたのや、漬物桶のくさつたのや、朽ちた材木などが散らかつていました。竹やぶの中にはしめつた風がいつぱいこもつていました。遠くの櫻の木では、若い蟬の聲がジイときこえます。竹やぶの中へ入つて行くと、古い竹の皮がたくさんとげとげの草の中へ落ちていました。むつは竹の皮をひろつて、町の牛肉屋へ買つて貰おうかと思いました。いくらになるのか見當もつきませんでした。一錢玉が山のように来るような氣がしました。だけど、落ちている竹の皮は、みんなくさりかけていました。

「仕方がない。」

そう思つて竹やぶを向うがわへ出て行きますと、朽ちてぼろぼろになつた風呂桶がありました。むつはその風呂桶を見ると、自分の父親の亡くなつた日を思い浮べました。その桶の中へ入つたら父親に逢えるような氣もしました。むつは草をむしつて、くさつた風呂桶の中へ敷き、やつと背のびをして、そのくさつた風呂桶へ入りました。夕陽がちようどその上に射しこんでいて、涼しい風が頭の上を吹いてゆきます。むつは神様になるのは、誰にも知られないでこんな所でお祈りしていることだと思ひました。

むつは手を合わせて、風呂桶の中で膝をたてましたが、これははまだ神様にはなれないと誰か云うようなのです。で、むつは風呂桶から這い出すと、薄い材木をかついで來たり、わらなわを探

して來たりして風呂桶のなかで自分の脚と腰をしばり、上へ、材木をならべてふたをしてしまいました。すき間からきれいな陽ざしがむつの體へ降りかかつて來ます。むつは大變愉しい氣持ちでした。やがて、いろいろなものがお迎えに來るだろうと思ひました。

むつは何時間かうとうとしたようです。ふと眼を覺しますと、波の音がざアと聞えて來ます。自分は船に乗っているのかと思ひました。天井を見ても眞暗でした。ときどき體中に蟲の這いあがるようなかゆさを覺えました。——しばらくぼんやりしていましたが、四圍がしんしんとしているので、體がふるえて仕方がない

のです。母さんは怒っているだろうなと思いました。

やがて、近くの鶏小舎がちよつと騒がしくなると、竹やぶの中へさくさく歩いて来る者がありました。一人の足音ではないようなのです。二人も三人も、四人も、もしかしたら四五十人も竹やぶへ入って来ているのではないかと思う程、がやがやと人間の聲と足音がします。むつは固くなつて息をひそめました。山賊が来たのだらうと思いました。晝間あんないたずらをしたから、エス様が魔物をよこしたのかも知れないと思いました。

「どうぞお許し下さい。もう、あんなことはしませんから、お許し下さい。」

むつはそんなことを祈りました。その行列は何だか灯をつけて

いるようなのです。がやがや言いながら、行きすぎてしまいました。が、しばらくすると、また二三人の足音がして、ふと、むつの風呂桶の前で止りました。むつは眼を固くとして死んだまねをしていました。死んだまねをしていたら大丈夫だと思つたのでしよう。天井をはぐる音がして、ちようちんの灯が風呂桶をのぞきこみました。

「おーい、いたぞオ！」

「おかアやア！ むつはいたぞオ。」

むつはびっくりしてしまいました。足先がぶるぶるふるえ出しました。引っぱり出されたら、どんなに殴られるか判らないと思ひました。

「おい、こりやア、まア、なわでしばられているぞ、どうしたのかや。」

「ほら、これが神がかりとか神隠しとか云うのじゃねえか。」  
「怖わがらせちやいけないよ。脊筋がぞくぞくするよ。」

むつは、たくさんのちようちにまもられて、大きな男の背におぶさつて家へ歸りました。家へ歸つてからも眼を固く閉じていました。村のひとが騒いでいるのが面白かったのですけれど、だんだん悲しくなりました。むつの母親はわけのわからないことを叫んで土間を上つたり降りたりしていました。太郎は火がついたように泣いています。むつは顔の上へ水を吹きかけられました。ふと眼をあけると、村中のひとたちがむつの顔をのぞきこんでい

ました。

むつは眼をあけると腹がへつたと云いました。母親はそば粉を  
かいて醤油をかけたのをむつの口もとへもつて來ました。

「明日は米の飯を食わしてやる。」

と、母親がふるえこんでいると、隣の茂の婆さんが、卵を飲ま  
してみると、言いました。むつはあわてて、卵は嫌いと言いま  
した。

「ま、元氣が出てええ。」

そう言つて、皆が秩序もなくむつへいろいろなことを尋ねるの  
ですが、むつは何を問われても知らぬと言いました。

「まさか、教會の先生が縛つてほうりこんだんじやあるめえな。」

と、異人の宗旨を嫌っている疊屋の親爺がこんなことを言いました。するとむつは、教會の先生を悪く云われたことに腹がたつてしまつて、天狗のようなおじさんが走っているのを見たら、ついて行きたくなつたのだと言いました。その天狗のようなひとについて行つてどうしたとたずねられると、もうその先は判らないと言ふのです。戸口ががやがやすると、駐在所の巡査と、木内先生が土間へ入つて來ました。木内先生はメリンスの帶をおたいこにしめていました。むつの枕元に坐ると、

「どつこも痛くないの？」

とききました。むつは赤くなりました。先生にうそを言うことだけは神様をあざむくようで、先生の眼を見ることが出來ません

でした。此一二年、村には變な人間も入りこまないのだし、これは神隱しのたぐいなのだろうと村の人達は言いあいました。むつはむつで、自分もそう思い始めました。——村中はむつの話でまたたくまにシゲキされてゆきました。

その翌日、むつが入っていたくさった風呂桶にメなわが張られました。——むつは學校へ行つても子供達に肩を取りまかれて、何度も何度も同じことを聞かれました。むつの母親は、前よりもひんぱんに方々の百姓家から仕事を頼まれましたが、頼まれる先々でむつの神隱しの話をしなければなりませんでした。むつの母親は手仕事を止めて同じことを話しました。





# 青空文庫情報

底本：「童話集 狐物語」 国立書院

1947（昭和22）年10月25日発行

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# クララ

林芙美子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>